

れき 民
となん歴史民だより vol.10

Morioka tonan history and folklore museum

平成19年3月23日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 Tel.019-638-7228

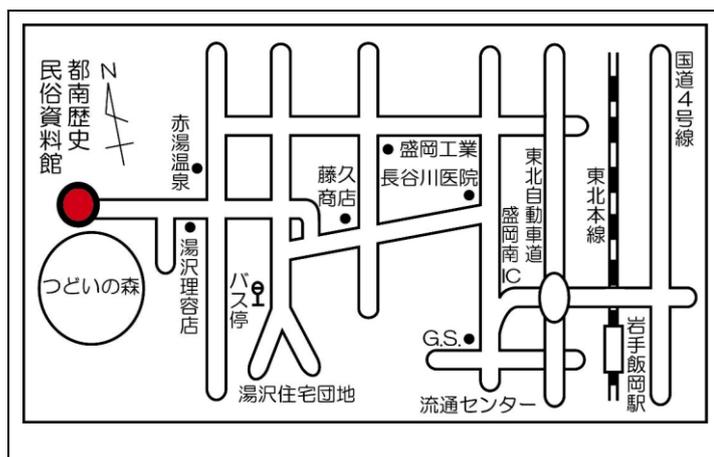


当館所蔵写真パネルより「糶がら焼」

MAP ☆ACCESS

— もくじ —

- ・ オシラサマ
- ・ 古文書の行間を読む楽しさ
- ・ 指定文化財紹介⑩
- ・ 民具・農具を貸出します！
- ・ 資料は語る⑩
- ・ となんの昔ばなし⑩



○利用案内

開館時間	午前9時から 午後4時まで
入館料	無料
休館日	月曜日 (休日に当たるときは、 直近の平日)
	年末年始

—オシラサマ—

オシラサマは、30cmほどの長さの桑の木や竹の先に、人間の男女や馬の顔を彫ったり描いたりして衣服（オセンダク）を着せ、信仰の対象にしたものです。東北地方特有の信仰で、養蚕や目の神とされています。岩手県を含めておもにオシラサマと呼ばれますが、オコナイサマやカノキジンジョウ、オシラボトケ、ジョウロクゼンジンなど地域によって数多くの呼び方があります。

一年に一度、一枚の布を着せ加える祭日は「オシラアソビの日」や「オシラボロギ」などと呼ばれています。衣装を着せる時、頭からかぶせる「包頭型」と頭を出した「貫頭型」がありますが、岩手県内では両方の型が混在しています。当館で所蔵している盛岡市指定文化財のオシラサマは貫頭型です。

オシラサマはほとんどが2体1組でまつられますが、1体の場合や、多い場合は23体の記録もあります。当館所蔵のオシラサマは6体ですが、以前は7体あったそうです。それぞれの家のオシラサマの数については色々な理由があるようですが、カマドワケ（分家）することと関係がありそうです。

祭日は1月16日や3月16日などが多く、岩手県では「十月仏（マイリノホトケ・カバカワサマ）」とあわせて、旧暦10月にまつる場合もあります。当館所蔵のオシラサマの祭日は旧暦10月17日だったそうです。オシラサマの祭日には、親類縁者やおもに近隣の女性が集まって拝み、衣装（新しい布）を着せ、両手に一体ずつ持って揺り動かしたり、抱いたりおぶったりして、オシラサマを遊ばせます。イタコ・オガミンなどの巫女を招いて祭文を唱えてもらうこともあります。

参考・引用資料/

岩手県立博物館 23 おしらすま 岩手県民間信仰事典 p58~60 1991

工藤紘一 岩手のオシラサマ おしら神の発見 遠野市立博物館第41回特別展 p51~56 2000

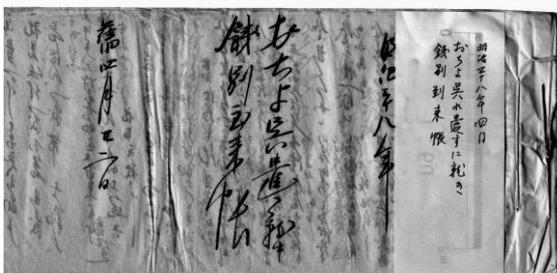
都南村誌編集委員会 宗教編 都南村誌 p375~879 1974



オシラサマ（大ヶ生）
（当館所蔵・盛岡市指定文化財）

古文書の行間を読む楽しさ

藤沢昭子（滝沢村古文書サークル）



おちよ呉れ遣わずに就き銭別到来帳

明治38年(1905)己巳(旧暦4月22日)の書留帳(横帳)があります。その年の正月に仲立嘉喜助という人の世話で、十三日町におちよさんがお嫁に行くことが決まり「祝酒が到来」で始まる書留帳には、祝いのお金・酒・肴が誰からいくら届いたという記載がされています。木綿一反・塩釜五本・こんにやく五丁・梅一箱・砂糖一袋・せんべい一袋など、祝いに届いた品を判読するのも楽しい発見があります。お祝儀3円50銭を六日町のY家では亭主・かかさん・おみつさんと三人で出したことも記されています。ちなみに同年の物価表によると上白米一升15銭5里、アンパン一個1銭とあります。

この書留帳以外におちよさんの嫁入りに実家が糸屋(呉服店糸治:中央公民館に移築されている旧中村家住宅)で用意した反物の種類や値段がわかる古文書もあります。この糸屋の古文書は達筆な番頭さんが書いたのでしょうか。どんな色柄のものだったのでしょうか。おちよさんは嬉しかったことでしょうか。そしてその後どんな人生を送られたのだろうかなど想像してしまいます。一文字、一行間に思いをめぐらしながら古文書を判読してみると、生きた人間の姿と出会えて楽しくなります。

盛岡市所在指定文化財紹介 ⑩



市指定有形民俗文化財

れんげはっかくちゅうがしきようとう 蓮華八角柱餓死供養塔

平成元年(1989)4月10日指定 盛岡市

報恩寺の裏山、国道4号線バイパスをへだてて、盛岡市営火葬場の北西の山腹にあります。

この供養塔は、天保6年(1835)に小野嘉興・平野慶好によって建立されたもので、碑の側面に記銘があります。

碑面には「天保巳午疫死四百八十三人之墓」と刻まれており、飢餓によって天保4年(1833)から同5年に報恩寺の御救い小屋で餓死した483人の霊を弔うために建立されたものです。

石材は花崗岩で、頂部には蓮の葉を型取った笠石をいただき、下部には蓮華型の座石があり、その下には台石があります。蓮華八角柱の供養塔で当地方の大飢饉の惨状を物語る重要な資料です。

天保癸巳 乾不レ協レ坤
老幼途轉 壯者四奔
不レ違措レ手 民人哀怨
吾両野氏 都中豪門
義賑「無告」 仁慰頑魂
爰建「貞石」 永百世存
功徳主 小野嘉興
平野慶好

高さ 200cm 幅 65cm

参考資料/ 盛岡市教育委員会 「盛岡の文化財」 1997

昔の暮らしを見つめてみよう

—学校や地域活動団体などへ—

農具・民具を貸出します!

当資料館の、数多くの民俗資料を学校や子ども会、地域活動などの場に広く役立てていただくために、所蔵資料の一部を貸出しします。長いあいだ使い込まれてきた資料一つ一つにはその家々の暮らしぶりや手づくりの道具に対する使い手の愛着が見え、手にとってはじめて知ることがとてもたくさんあるものです。

資料の借受を希望する場合は、当館にご連絡下さい。

「農具・民具を貸出します!」を利用して



このほどハートフルもりおかでは農具や生活用品の一部をお借りして、施設1階のホールに展示しました。

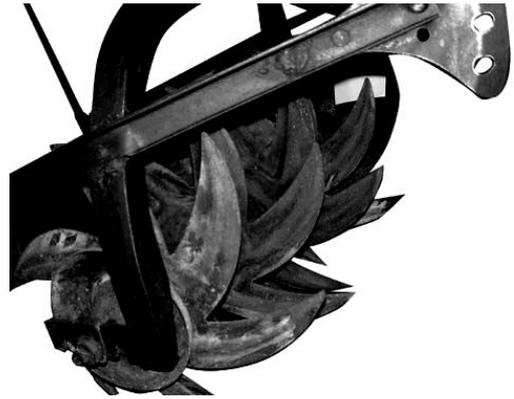
もみかき、まとりなどの農具、ヒツ、枘、煎餅の焼型、アイロン、コテ、霧吹き、石臼などの生活用品、蓄音機、竹スキー……18種20点。施設の入所者、通所リハビリテーションの利用者、スタッフが展示品を囲み「ええーっ!これってアイロンなのー?どうやって使うの?」とスタッフが聞けば、「ここの中に真っ赤な炭を入れて、あっつぐして使うんだー 電気なんてなかったんだもの〜」と会話が弾みます。

使いこまれた道具に見えてくる家々の暮らしぶり、使い手の愛着にふれ、昔を懐かしむ思い出話がたえませんでした。

JA 岩手県厚生連介護老人保健施設
ハートフルもりおか 住吉淳子さん



水田碎土機(上飯岡)



自転する刃車

この農機具の名前は水田碎土機(すいでんさいどき)といい、代かきを行う道具です。家畜に引っ張らせ、自転する刃車が土に食い込んで砕き、その後の板(レーキ)でならす構造です。北陸地方で使用され、その後急速に全国に普及し、昭和初期から30年代あたりまで使われました。代かきとは、水田に水を引き入れて土を砕いてならす作業で、田植えの準備(漏水防止、雑草発生の抑止、肥料の混和など)を行います。一般に土を砕く道具は農機具の中で最も種類が多いと言われ、代かき用具もその一つです。

代かきに関する研究が進むにつれて、それまでの代かきでは土の塊を砕き過ぎていることが分かってくると、過破碎を避けるような農機具への改良や開発がされるようになりました。その結果、この資料のような畜力用としての刃車型碎土機が生まれ、さらに耕うん機用としては代かき用ロータリー爪や代かき用ローターなどができました。機械化がされた現在では代かきロータリー爪と代かき用ローターが主に使われ、畜力を用いるこの資料のような刃車型碎土機は使われなくなっています。

参考・引用資料／ 田原虎次 「稲作における農機具の変遷」 農林水産技術会議事務局 1990

となんの昔ばなし⑩

『荒鉄の釜(あらてつのかま)』

江戸時代の終りごろというだけで、時期ははっきりしませんが、三本柳出身で荒鉄という力士がいて怪力をほこっていました。幼いころから人並みはずれて力が強く、はって歩くころは重い石臼につないでおくど、その石臼をするすると引きするほどでした。少年のころ、囲炉裏(いろり)にあたっていて、鉄の火箸をよって縄ようにして親たちにしかられたという話も残っています。青年になってから、北上川でサケやマスやコイなどをとり家業の手助けをしていましたが、その時なども漁用の小舟はもちろん、渡船場(とせんば)の小船などもひとり横に背負って平然としていたことです。

南部の殿さまのおかえ力士としても、その怪力は認められ、評判はよかったです。技を磨こうと江戸へ修業しに出かけたことがありました。その途中、宮城と福島の間あたりで、荒鉄は巨石を軽々と持ち上げ手車にとって空中高く、くるくる回すという離れ業を演じてみせたことがあります。土地の人々はその怪力に驚き、その巨石を「荒鉄の手車石」として大事にしたと伝えられています。

江戸へ修行に出かけて数年後、顔色が青くやせおとろえて、荒鉄が三本柳に帰ってきました。わけを聞いてみると、彼はあまりの怪力であったので、仲間のうちの悪い力士がそれをねたむあまり毒を盛ったからとのことでした。それを聞いた三本柳の人たちはおおいに荒鉄をいたわりました。

それほど強い力の持ち主だっただけに相当の大食漢(たいしょくかん)・大食いをする人)でもあり、三升(一升・約一・八リットル)飯ぐらいはペロリと平げたといえます。その荒鉄が飯を炊いたりおかゆを煮たりしたと伝えられる釜が「荒鉄の釜」として当資料館で展示されています。それは五升程度入る鉄の坊主釜(つばなし釜)であり、荒鉄の怪力物語とともに伝えられています。(終)



(当館所蔵)

■ 出典 『となんの民話』

(都南歴史民俗資料館)